

アピモンディア 2005 参加報告

— 総会取材を中心に —

榎本ひとみ

アピモンディア（国際養蜂協会連合）は各国の養蜂関連団体が加盟する国際組織で、養蜂に関しては世界最大規模の団体である。1897年、ベルギーでの最初の会議以来、養蜂に係わる科学的、生態学的、社会的、経済的側面が世界のあらゆる国で進展すること、また各国の養蜂家の集まりと研究組織や養蜂に携わる世界中の人々との協力関係が促進されることをめざしている。また、養蜂技術の進歩とミツバチ生産物から適正な利益を得られる環境を整えるために、あらゆる効果的な方策を実行することもアピモンディアの重要な使命と位置付けている。

具体的には情報交換を促し、討議の場を提供するために、国際養蜂会議をはじめ、多くの研究大会、セミナーを企画し、養蜂家、研究者、ハチミツ流通業者、立法者が一堂に会して、互いに耳を傾け、学ぶ機会を提供している（ヨーゲンセン会長の挨拶より http://www.beekeeping.com/apimondia/index_us.htm）。

日本からは（社）日本養蜂はちみつ協会が加盟しており、1985年に第30回大会を名古屋



図1 記念押印された大会記念切手貼付の封筒に招致し、東洋で最初に開催した実績がある。

国際養蜂会議

アピモンディアが2年ごとに国際養蜂会議を開催することは、日本からの参加者も多く、良く知られている。けれども、そこで行われる総会は私のような一般参加者から見れば、外国語の演説が続く、長々しい儀式としか映らない。しかし最近、アピモンディアのウェブサイトでは総会に先立って行われた役員会を含め、各会議の詳細な内容と、総会で採択された活動計画がまとめられ、公開されるようになった。これを読むと世界の養蜂家が今何に興味をもち、何を懸念しているか、かいま見ることができるので、会議の報告を含めて紹介したい。

総会は通常、アピモンディア役員が連合加盟団体からの代表者に対して説明などを行う代表者会と、会議参加者全員に対して報告する全体会の2段階方式で行われる。2005年8月にアイルランドの首都、ダブリンで行われたアピモンディア 2005 - 第39回国際養蜂会議では、



図2 会場入口で出迎えてくれたのは巨大なミツバチに囲まれた花の精？（左）。第39回国際養蜂会議の開会式で壇上に並んだ役員・委員。挨拶を述べているのがヨーゲンセン会長

22日夕方に総会第一部の代表者会があり、会議最終日の25日午後に第二部となる全体会が開かれ、私もこれに出席した。

総会討議項目

以下は8月22日の代表者会の議題である。25日の全体会でもほぼ同じ内容が報告され、正式に承認されている。

- 1) 討議項目の承認
- 2) 第38回国際養蜂会議(2003年スロベニア・リュブリャナ)総会で採択された行動計画に関する活動報告
- 3) 2003～2005年期の役員会、各常設委員会活動報告
- 4) 2003～2004年期の会計報告
- 5) 2006～2007年期の予算承認
- 6) 同期のアピモンディア行動計画
- 7) 同期のシンポジウム、国際会議計画
- 8) 新規会員の承認
- 9) 会費未納による退会について
- 10) アピモンディア規約変更の討議と採決
- 11) 任期満了に伴う役員2名の改選
- 12) 任期満了の委員長4名と事務局長の改選
- 13) 第41回国際養蜂会議(2009)招致立候補団体によるプレゼンテーション
- 14) その他

総会出席者

加盟団体から総会に出席し投票権を行使した代表者(代理人を含む)の国籍は39か国であった(表1)。代表者会には加盟66団体(複

表1 総会出席加盟団体の国籍

アルバニア、アルゼンチン、オーストラリア、オーストリア、ベルギー、ブラジル、ブルガリア、チリ、中国、チェコ、クロアチア、キューバ、デンマーク、フィンランド、フランス、ドイツ、ギリシャ、ハンガリー、アイルランド、イタリア、日本、リトアニア、ルクセンブルグ、メキシコ、オランダ、ノルウェー、ルーマニア、ロシア、スロベニア、南アフリカ、スペイン、スウェーデン、スイス、トルコ、ウガンダ、ウクライナ、英国、合衆国、ベトナム

正式国名の英語表記順

数の団体が加盟する国もあるため、国の数より多い)から選挙権を持つ40名が出席し、総会成立、ヨーゲンセン会長を議長とした。続いて会長とジャンノニ・セバスチアニーニ事務局長による各報告があった。

役員会報告

役員会及びアピモンディア財団(FITEA)運営委員会がローマで1回、ダブリンで2回開かれた。2003年11月から2004年5月まで、内部のワークショップがローマでもたれ、アピモンディアの使命、現況、将来像について討議が重ねられた。2009年の国際養蜂会議開催に立候補した6か所への査察を行った。アピモンディアの存在をアピールするために役員は多数の催しに参加し、その結果アピモンディアへの加盟を表明する団体は急増中である。

すべてのアピモンディア役員はアイルランドの組織委員会と第39回大会の開催に向けて、またオーストラリアの委員会とは第40回大会に向けて、協力して準備を進めた。

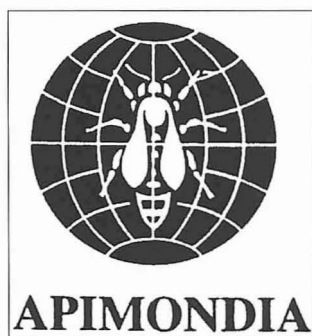


図3 アピモンディアのロゴ(左)と総会(全体会)風景(右)



第 39 回会議における問題点

大会参加のためにアイルランドの入国ビザを申請した人々の中で、ビザ発行を認められない人や発行に手間取り会期に間に合わない人ができている。その原因には、多数が集中申請したことや、書類に不備があった人も含まれるが、入国管理局の調査から申請者がアピモンディアへの出席を理由にしているが、養蜂にまったく関係を見いだせない場合などがあげられている。

今後のアピモンディア開催では現地の組織委員会に対し、参加希望者の入国ビザ申請に関して有効な支援体制を整えること、入管当局と密に連絡を取ることを、高騰する参加登録料の抑制と共に、求めることとした。

新規加盟が増えている現状から、大会に集う各国代表者が重要な権利である総会での投票について良く理解できるように、2006年5月に「国際会議組織運営問題検討ワークショップ」を開き、対策を検討する。



図4 アピモンディア 2005 の会場、ロイヤルダブリンソサイエティー (RDS) 正面 (上)。RDS は世界的に有名なダブリンホースショー会場でもある。前週に行われた国際馬術競技会の余韻を残す、パドックを望む優雅な部屋が、各セミナーやワークショップ、ミーティングなどに充てられた。

表2 アピモンディアが 2004 ~ 2005 年期中に後援した養蜂関連諸会議

・熱帯養蜂 花粉媒介と生物多様性保存のための研究開発 (コスタリカ・サンホセ 2004 年2月)
・第2回ハチミツへの残留物質予防シンポジウム-養蜂作業の変更点 (ドイツ・チェレ 2004 年4月)
・第1回養蜂家組合と協会組織運営についての世界シンポジウム (アルゼンチン・メンドーサ 2004 年9月)
・第1回途上国の国際ハチミツ貿易にかかわる懸案シンポジウム (ベトナム・ハノイ 2004 年11月)
・蜂病の診断法 (アイルランド・ダブリン 2005 年8月)
・ハチミツ貿易ワークショップ (アイルランド・ダブリン 2005 年8月)
・アピセラピー研修コース (キューバ)
・今後のアピセラピープロジェクト実施可能性調査 (キューバ、ブルキナファソ)

常設委員会の活動報告

7つのアピモンディア常設委員会は、委員長を中心に国際養蜂会議における学術プログラムの運営を行う。さらに近年は常設委員会が関係団体と協力して、アピモンディアの後援による多様な国際シンポジウム等を企画しており、今期も表2にあるように多数開催された。これらの新しい活動はアピモンディアの対外的な存在感を増し、新たな会員獲得にもつながっている。

アピモンディアのウェブサイトも拡充され連合が主導する活動のニュースや報告が定期的の上梓されている。

2003 ~ 2004 年期中の会計報告

事務局長から米ドルに対するユーロの値上がりがかつての会費収入にマイナスの影響を大きく与えていることをあげ、会費を現状の米ドル建てからユーロ建てに変更する提案があり、承認された。

2006 ~ 2007 年期中の主な活動予定

メルボルンのアピモンディア 2007 開催はもとより、FAO との共催で 2005 年9月にイタリアで開かれる「東欧の村落開発に係わる学際的懸案」ワークショップ、2006年5月にローマで行う予定である、「国際養蜂会議開催のための企画運営プロトコールを作成する会合会議・シンポジウム企画運営問題」などがあげられた。

各常設委員会に係わる多数の国際会議予定には第4回カリブ海地域養蜂会議(トリニダード、

トバゴ 2005 年 11 月), 森林再生と在来種ミツバチによる養蜂 (エルサルバドル 2005 年 12 月), EurBee2006 において, 蜂群の診断と, ミツバチの採餌行動に関するいくつかのセッションを準備開催する (チェコ 2006 年 9 月), 天然物とウイルス, バクテリアの処理 (ベルギー 2006 年 9, 10 月), 「ハチミツ貿易と残留

物質問題」フォローアップ (アジアで, 2006 年) 等があった。これら会議についての最新情報は アピモンディアのウェブサイト (<http://www.apimondia.org>) に随時掲載される。

連合への加入・退会

この 2 年間に新規加入を申請した 16 団体の



図 5 ミツバチ科学研究施設松香光夫教授と旧交を温めるアピセラピー委員会シェルブリエ委員長 (左上), 養蜂による村落開発活動の支援のために寄贈され, オークション進行中のミツバチ柄小布だけで作られた養蜂関係者垂涎のキルト作品と村落開発養蜂委員会ブラッドベア委員長 (右上), 国際ミツバチ研究協会のジョーンズ事務局長とミツバチ科学研究施設中村主任 (中左), 第 8 回アジア養蜂研究協会大会組織委員のオーストラリアのリドリー氏に「日本の蜜源植物」を手渡す日本養蜂はちみつ協会酒井理事 (中右), 「日本の蜜源植物」も展示してあった愛知の養蜂研究所のブースで井上さんと酒井理事 (下左) すっかりアピモンディアのエキスポ会場では常連となった, 大阪の東養蜂場の出展ブース (下右)

国籍はブルガリア、ブルキナファソ、コンゴ共和国、ナイジェリア、ポルトガル、スペイン（2団体）、トルコ（2団体）、ウズベキスタン、ドイツ、ガーナ、ギリシャ、クウェート、英国、ベネズエラである。

リビアの2団体とポーランドの1団体が4年連続して会費納入がなかったため、加入継続を

希望するならば、6か月以内の滞納会費払込を求められることとした。

会則に関する変更点

「ミツバチの病理学」常設委員会の名称を「ミツバチの健康」とすること、会費の米ドル建てからユーロ建てへの変更などが承認された。



図6 にぎやかなアピエクスポ会場（上左）。開催招致を狙う各国代表が大きなブースを構えるほか、主に企業の出典が並んだ。2階回廊（上右）にはポスター発表が掲示された。またエクスポ会場の奥にはハニーポットなどの工芸品（中右）やレモネード売り（中右）などの出展場としてヴィレッジが設けられた。その中にアイルランド養蜂協会連合の展示ブースがあり、今回唯一の観察巣箱に入った黒蜂がいた（下左）、また国立博物館の提供提示にはで10～12世紀頃に使われていたという石の巣箱もあった（下右）。

南米各国の会員から共同で提案されている「養蜂家の団結、生産、地域開発と、環境開発を考える」ワークグループを村落開発養蜂委員会内に持つこと、またハチミツ国際パッカー協会と、国際ハチミツ委員会からの申し出でに応じて、既存の養蜂技術・器具委員会内に、恒久的に「ハチミツ品質管理」ワークグループを持つことも承認された。これを受けて同委員会は次回総会で委員会名を活動内容に即した形に変更する見込みである。

役員人事

副会長 Dr. E. Schieferstien の退任にともない、後任に Mr. P. McCabe (アイルランド), Mr. L. Martínez (アルゼンチン), および Mr. L. Bodnarchuk (ウクライナ) の各氏が立候補、Martinez 氏が新副会長に選出された。また、任期満了を迎える事務局長, Mr. R. Jannoni-Sebastianini は会合出席者の喝采を受けて再任された。

常設委員会委員長では Dr. N. Bradbear (村落開発養蜂), Dr. M. Sommeijer (花粉媒介と養蜂植物) それに Mr. D. Q. Tam (養蜂経済) が同様に拍手により再任された。ミツバチ生物学委員会は Prof. Dr. R. Crewe が退任、変わりにオーストリア, グラーツ大学生理学部動物学研究所の Prof. Karl Crailsheim が新委員長に就任した。今大会のミツバチ生物学委員会を代理委員長として支えた Prof. O. Van Laere と、退任する Prof. R. Crewe, Dr. E. Schieferstein に対し

表3 アピモンディア新役員・委員

・会長・・・A. S. Jørgensen (デンマーク)
・副会長・・・L. Martínez (アルゼンチン)
・事務局長・・・R. Jannoni-Sebastianini (イタリア)
常設委員会委員長:
・アピセラピー・・・T. Cherbuliez (合衆国)
・ミツバチ生物学・・・K. Crailsheim (オーストリア)
・養蜂経済・・・D. Q. Tam (ベトナム)
・花粉媒介と養蜂植物・・・M. Sommeijer (オランダ)
・村落開発養蜂・・・N. Bradbear (英国)
・ミツバチの健康・・・W. Ritter (ドイツ)
・養蜂技術と器具・・・G. Ratia (フランス)

て役員会から感謝の念と今後も変わらぬ交流を期待する旨が表明された。この2年期のアピモンディア役員体制は表3のように決まった。

第41回国際養蜂会議(2009)開催地の決定

次々回開催地の選出は総会の最もエキサイティングな部分である。アピモンディアは通例欧州内と、それ以外の地域での開催を交互に設定する。2007年はオーストラリア・メルボルンなので、その次は欧州からの候補が有利と見られた。しかし前回オーストラリアと招致を競い、惜しくも逃したアルゼンチンは南米各国を巻き込んで、展示会場に大きなブースを確保するなど、今回も熱心に招致活動をしていた。

22日の代表者会ではグラナダ養蜂組合(開催地はスペイン・グラナダ)、オーストリア養蜂組合(ウィーン)、フランス全国養蜂家連合(モンペリエ)、シエラノルテ・マドリッド養蜂組合(スペイン・マドリッド)、アルゼンチン



図7 これから投票を控え、やや緊張した雰囲気漂わせる会場前方の代表者席(左)。一方で後方の一般参加者席はリラックスした雰囲気、2009年の開催地決定を待っている(右)。

養蜂協会(メンドーサ),ブルガリア養蜂組合(ソフィア)が順次招聘演説を行った。

25日の全体会では,次回開催地によるプレゼンテーションから始まった。お揃いのブルーのベストを着た多数のオーストラリア代表団は養蜂会議当初から,宣伝資料を配付したり,無料夕食会を催すなど強力にメルボルンへの招聘活動をしていた(大会案内サイトは <http://www.apimondia2007.com/>, このサイトからメーリングリストに登録して最新情報を入手できる)。全体会ではオーストラリアの美しさを謳うビデオ映写で格調高くまとめた。

続いていよいよ投票による次々回開催地の決定である。大量に応援団をダブリンに送り込んだアルゼンチンやフランスは,メンバーがユニフォームを着たり,会場内に固まって席を確保するなど存在をアピールしている。満場の参加者が見守る中,6名の招聘演説に続いて,投票権を持つ代表者による投票が行われた。第1回投票では欧州の票が分散して,アルゼンチン養蜂協会がトップに立ったが,決選投票では,フランス全国養蜂家連合が逆転して,第41回国際養蜂会議は2009年9月に南フランス・モンペリエで開催することが決まった。

立候補し落選したすべての候補地代表に対して役員から,会合を開き,今後の活動について

調整する機会をもちたいと提案された。

アピモンディア有限会社

かつて国際養蜂協会連合の経営状態が悪化し,長年の間に多額の負債を抱える状況になっていた。その改善のために資産を切り離して別に有限会社を設立し,組織の経営再構築を委任した。このアピモンディア有限会社の状況について事務局長が報告。これまでに懸案の解決がほぼ終わり,会費収入がより多く,安定的になった。

リストラが完了したので,資産を再び有限会社から連合に戻し,その負債を順次返済することが可能になるだろう。会長,事務局長は有限会社の会計担当者として定期的に会合を持っている,とのことである。

2005年から2007年までの行動計画

前回総会決議項目についてその後の対応を会長が報告,それを踏まえて,全体会では新しい行動計画(表4)が提案,承認された。

総会が終わり,続いて閉会式である。ヨーゲンセン会長は閉会演説でアイルランド組織委員会と,大会の円滑な運営を支えた多くのボランティアに感謝の言葉を述べた。第39回国際養蜂会議大会長,P.マケイブ氏はアピモンディ

表4 2005年から2007年までのアピモンディア行動計画

-
- ・ 会員とのコミュニケーションを増やす
 - ・ ウェブサイト www.apimondia.org の更新, デジタル版アピアクタの無料公開
 - ・ 第40回アピモンディア開催へ向けてオーストラリア組織委員会との協力
 - ・ 世界の養蜂家,研究者にとってより魅力的なアピモンディアとなるための方向を検討するワークショップを持つ
 - ・ FAO等国際組織との連携を促進し,アピモンディアに対する認識が高まることをめざす
 - ・ 各国の担当研究機関が,国内ミツバチ種の特徴に関わる基礎的,応用的データ収集を促進するよう促す
 - ・ アピモンディアは,その活動目的が持つ人道的側面に特に注意をはらう
 - ・ 村落開発養蜂常設委員会内に,アフリカのハチミツ貿易を促進する為の地域フォーラムを設置する
 - ・ アフリカの小規模養蜂家がフェアトレード協会を通じて市場を拡大できるよう支援する
 - ・ ミツバチのポリネーターとしての役割について認識が高まり,この方面でミツバチ利用がさらに広がるよう広報に努める
 - ・ 養蜂と環境との相互作用について情報をまとめ公開する
 - ・ 養蜂家向けに花粉媒介ワークショップを開催
 - ・ 新しい需要が発生している高品質なミツバチ生産物を製造する為の,適正な用具類(食品グレード素材,温度管理など)を養蜂器具メーカーが,市場に提供できるよう要請する
 - ・ アピモンディアウェブサイトにある7つのフォーラムの活動を促し,あらたに世界の養蜂器具カタログと販売者リストを加える
 - ・ 全世界のミツバチ種の保存と,その適正な選抜育種計画を促す
 - ・ ミツバチの採餌先管理のための地理情報システム(GIS)など,新しい技術開発を促す
 - ・ アピモンディアはミツバチ生産物の品質にかかわるすべての問題に強く関わっていく
-



図8 ミツバチ生物学分科会でコミツバチの発表をするタイ・チュラロンコーン大学のウォンシリ教授（上左）、アピセラピー分科会で講演するドイツアピセラピー協会のスタンガッシュ会長（上右）、研究発表を聞くヨゲンセン会長とジャンノニ・セバスチアニーニ事務局長（下左）、アピセラピー分科会でプロポリスの抗癌効果について講演する神戸大学の金沢教授。

ア旗を、2つの大会の関係を象徴するものとしてオーストラリア代表団のS. フースター氏に手渡し、これをもってダブリンのアピモンディア 2005 は正式に終了となったのである。

アピモンディア 2005 の概要

日本からも総勢 30 名が参加した本大会には、111 か国、総計 3500 名以上が参加した。ここまで詳細に紹介してきた総会以外にも、もちろん通常の大会同様に、各分科会、ワークショップ、アピエキスポ、各種コンテスト、ツアーやカルチャーショーなどが盛りだくさんにあり、これだけ多数の参加者を捌くのはなかなか大変なことであったと思うが、実際、多くのボランティアに支えられて運営されていた。

各分科会とワークショップ

アピモンディア各委員会が主催する分科会

（シンポジウム形式）とワークショップは会期中に多数開催されたが、発表数の関係から同じ委員会が開催する分科会が複数、日をまたがって開催されるのはともかく、会場がその都度異なっていて、いくつか興味のある講演を聞き漏らすことになった。また他のプログラムに比べて分科会の運営は今ひとつで、この点だけは今大会の企画上の弱点として映った。

また、アピモンディアは、大会の性質上、主体は養蜂家であり、学術的な部分もどちらかというと参加する養蜂家のために提供されているプログラムのひとつで、研究者が自分の成果を発表する機会という一般的な学会の目的とはかなり異なっている。いくつかの発表は、難解で、研究者側にも理解や配慮が必要と思われた。

すべての分科会に参加できたわけではないので適正な比較ではないが、今回は特に蜂病（ミツバチの健康）委員会、アピセラピー委員会が

多くの聴衆を集めていたようであった。特に、第3日に行われた蜂病シンポジウムは、会場が狭かったこともあったが、最初から満席・立ち見が出る状態で、この分野への関心の高さを感じさせた。また、個々の研究成果の発表ではなく、蜂病を防ぎながら安全な生産を目指すにはどのようにすべきか、研究者から養蜂家への

提言というスタイルもよかった。なお、このシンポジウムについては本号の「蜂病対策に向けた新しい国際的な動き」(中村・酒井, pp. 101-108)をご参照いただきたい。

今大会では、日本からは、アピセラピー分科会で、神戸大学の金沢教授が大腸癌に対するブラジル産プロポリスの成分アルテピリンCに



図9 コンテスト会場で、審査のために入念な打合せを行う審査員と並べられた数々のハチミツ（左上）、巣蜜はきれいなガラス箱に入れた状態で展覧されており、大変目を引いた（右上）、スイート、セミスイート、ドライなど各種目別に審査がされたミードもコンテスト会場の色彩的雰囲気を盛り上げていた（中左）、コンテスト用に並べられた形も作り方もさまざまなるうそく（中右）、ハチミツ入りケーキも果実入り、ナッツ入りなど、審査区分が細かい（下左）、展覧された書籍類（下右：中央のひときわ大きな本が（社）日本養蜂はちみつ協会が出品した「日本の蜜源植物」）



図10 アイリッシュナイトは大盛況。開催者側の予想を上回る参加者だったのか、入口から中に入るのも（左）、チケット制の食事を受け取るのも（右）、長い長い列に並んで待たなければならなかった。

よる制癌効果について口頭発表を、また国際科学振興財団の笹川博士がアジアのミツバチにおける化学情報物質と社会行動について、(株)山田養蜂場の沖原氏が抑うつ状態に対するローヤルゼリーの効果についてそれぞれポスター発表を行った。

コンテスト

各種のコンテストにも力が入っていた。日本からは日本養蜂はちみつ協会刊行の、「日本の蜜源植物」が出品されていたが、惜しくも入賞を逃した（本号 p.139 掲載の同書の書評もご参照いただきたい）。

ハチミツやミードなど、コンテストの出品作が並べられたヴィレッジエリアの一角は、天井から外光が取り入れられるようになっていて、琥珀色の光りが周囲に拡散する様は実に神々しく、大変美しい演出がなされていた。今大会で、



図11 ミツバチとの出会いは極めてまれな旅になったが、マルハナバチは随所で見られた。

最も注目に値したのは、このコンテストの企画や演出の部分であったと思うほどであった。

ツアー

閉会式翌日に催行されたツアーは数コースに分かれていて、いずれもダブリンを離れて各地に向かうものであった。私たちが参加した北アイルランド方面行きは、聖パトリックのゆかりの地、ダウン



図12 アイルランドの守護聖人でもあり、またミツバチの守護聖人でもある聖パトリックの墓。

パトリックにある聖パトリック・センターと大聖堂、そこにある聖パトリックの墓を訪ねるコースであった。ただ、ほぼそれだけで、帰路に国境を越えて北アイルランドに入ったものの、途中で養蜂家を訪ねる訳でもなく、まったくミツバチにはお目にかかれないうままであった。アピモンディアのツアーとしては珍しく、企画としてどうかという印象であった。

(〒194-8610 町田市玉川学園 6-1-1 玉川大学ミツバチ科学研究施設内 アジア養蜂研究協会)

(写真提供：松香光夫，中村純，中村佳子)